

# 日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所  
162-0805 東京都新宿区矢来町 65  
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175  
発行者 総主事 司祭 矢萩新一

## 「聖霊を受けるということ」

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

「彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」  
(ヨハネ 20 : 22、聖書協会共同訳)

心地よい初夏の季節の中、私たちは復活節の期節を過ごし、  
聖霊降臨日を迎えようとしています。

4/28～5/5に香港で行なわれたACC-17(全聖公会中央協議会・世界聖公会の決議機関)の後半3日間だけ陪席することができました。会議の終盤で、米国聖公会の議員提案の「ACCの行動規範である『私たちの信仰と倫理』に明記されているように、セクシュアリティのために疎外されている人々の神の子としての尊敬と尊厳を認め、アングリカン・コミュニオンに生きるいのちとして十全に含まれることを再確認する。」という決議案について議論する場面を経験しました。アングリカン・コミュニオンに十全に含まれているという表現を巡って、LGBTの方々の存在を文化的あるいは信仰的良心によって受け入れ難いという立場の地域の議員からの反発の声や、すでに主教や聖職として按手された方々、同性のパートナーシップを結んでいる方々が信仰生活を送っている地域の議員から「このことをアングリカン・コミュニオンとして認められなければ、自管区に戻って説明できない」という声があげられました。最後はカンタベリー大主教が中心となって、相互理解と調整に尽力するという決議として採択されましたが、決議の後に両極の意見を交わした議員が立ち上がり、抱き合って多様性の一致を目指す姿勢を示したことが、とても印象的でした。様々な考えや意見が違う人々が集まり、その違いを認め合いながら、イエスさまのみ名において一致する努力を重ねていく聖公会の素晴らしさと、課題の重さを痛感した場面でした。

私たちも普段の教会での信仰生活において、様々な思いや願いを持って集まり、祈る共同体ですが、互いの思いを聴き合い、

## □会議・プログラム等予定

(2019年5月25日以降)

### 5月

- 27日(月) 原発のない世界を求める国際協議会海外ゲストフィールド・トリップ〔福島〕
- 28日(火)～31(金) 原発のない世界を求める国際協議会〔仙台〕

### 6月

- 3日(月) UNCSW(国連女性の地位委員会) 振り返り〔管区事務所〕
- 11日(火)～12日(水) 日韓協働合同会議・フィールドワーク〔横浜・川崎〕
- 17日(月)～18(火) 正義と平和・ジェンダープロジェクト会議〔管区事務所〕
- 17日(月)～19(水) 定期主教会〔ナザレ〕
- 20日(木)～21日(金) 祈禱書改正委員会〔管区事務所〕
- 21日(金)～24(月) 沖縄週間/沖縄の旅〔沖縄〕

### 7月

- 1日(月) 主事会議〔管区事務所〕
- 1日(月) 青年委員会〔管区事務所〕
- 2日(火) 原発のない世界を求める国際協議会実行委員会〔管区事務所〕
- 4日(木) 財政主査会〔管区事務所〕
- 9日(火) 正義と平和委員会〔管区事務所〕
- 17日(水) 常議員会〔管区事務所〕
- 18日(木) 文書保管委員会〔管区事務所〕
- 22日(月) 正義と平和・憲法プロジェクト会議〔名古屋〕

### <関係諸団体会議・他>

- 5月28日(火)～31(金) NCC 日韓教会協議会〔東京〕
- 30日(木)～6月9日(日) 米国が来ますように(Thy Kingdom Come) キャンペーン
- 6月6日(木) NCC 主催・宣教会議実行委員会〔早稲田〕

(次頁へ続く)

具体的な出会いの中で変えられていくことを恐れずに、一人ひとりのいのちを大切に作る共同体であり続けたいと願います。そこにこそ、聖霊という神さまの息吹が吹き込まれ、豊かな交わりが実現していくのだと信じています。

## Alleluia

### □各教区

#### 北海道

- ・ 教区宣教145周年教区礼拝 5月18日(土)  
10時半 札幌キリスト教会 説教:中部教区  
主教 ペテロ渋澤一郎

#### 東京

- ・ 教区合同聖餐式(入信の式) 6月9日(日)  
聖霊降臨日 14時 香蘭女学校礼拝堂 司  
式・説教:主教 フランシスコ・ザビエル高橋  
宏幸

### □関係諸団体

#### 日本聖公会 GFS

- ・ 第64回GFS全国研修会 2019年10月11日  
(金)～13日(日) 鹿児島復活教会 参加  
費:10,000円(ホテル別) 申込締切2019年  
7月31日(水)

(前頁より)

- 11日(火)～12日(水) 日本聖公会婦  
人会総会〔志木〕
- 27日(木) NCC 役員会〔早稲田〕
- 27日(木) 日キ連常任委員会〔早稲田〕
- 7月4日(木) NCC 役員会・常議員会〔早  
稲田〕
- 14日(日)～15日(月) 聖公会女性フォー  
ラム〔奈良〕
- 14日(日)～16日(火) NCC 主催・宣  
教会議〔東京〕
- 25日(木)～27日(土) 聖公会保育  
連盟大会〔横浜〕

- ・ 第23回GFS世界会議 2020年7月9日(木)  
～19日(土) 開催地:南アフリカ共和国ヨハ  
ネスブルグ ジュニア代表者募集:申込締切  
2019年6月30日 問合せ:日本聖公会北海  
道教区事務所気付 日本聖公会北海道教区  
GFS TEL:011-717-8181

### ■訂正とお詫び

- ・ 代祷表2019年4月4日 (誤) 守口オーガス  
ティン教会→(正) 守口聖オーガスティン教会
- ・ 『管区事務所だより第342号』4頁 下から  
3行目 (誤) YMCA→(正) YWCA  
お詫びして訂正いたします。

## 《人事》

### 東北

<信徒奉事者認可>

(大館聖パウロ教会)

2019年4月4日付

クララ小田切光子、マルタ田畑瑠美子、ヨセフ佐藤 進

## 《教会・施設》

徳島聖テモテ教会(神戸) FAX 新設 088-677-5551 / 電話番号は従来通り



## 「原発のない世界を求める国際協議会」と日本聖公会

— 日本聖公会から世界に発信するもの —

日本聖公会首座主教 北海道教区主教 ナタナエル 植松 誠

2011年3月11日に発生した東日本大震災から8年2か月が経ちました。被災地では目に見える形での「復興」は進んでいるように思えます。津波によって大きな被害を受けた地域は、土砂をかさ上げして、新しい土地を整地し、街づくりが始まっています。仮設住宅での生活をされていた方々の多くが、復興住宅や、また新しく整備された元の市街地に移って生活を始めています。しかし、そのような被災地にあつて、「目に見えない」部分では、まだまだ被災者、特に高齢者や独居者、生活困窮者など、所謂「社会的弱者」の方々は、「復興」から取り残され、たくさんの方々の困難を抱えておられることも確かです。そのことを忘れてはならないと思います。

今回の東日本大震災の被害の中で、今もほとんど手を付けられていないのが、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって引き起こされた災害です。大量の放射性物質が広大な地域に降り注ぎ、その除去もまだまだできていません。今もいたるところに除染で排出された土などを入れたフレコンバッグが山積みとなっていますが、一時的な保管として、被災地に野積みされているこれらのバッグが、8年を過ぎた現在、それらが破れて中の土砂が外に漏れだしているケースもたくさんあると聞いていますし、その最終処理場がどこになるのか今も決まっていないのが実態です。福島第一原発から遠く離れた郡山のような市街でも、今まで除染を繰り返してきたにもかかわらず、雨が降り風が吹くと、場所によっては放射線値が急激に上昇する「ホットスポット」が今現在でもあります。このように、原発事故によってもたらされた被害は今も進行中ですし、事故を起こした原発のメルトダウン現場での廃炉作業は、これから何年かかるかまるで分からない状態です。

原発の周囲には汚染された水を入れるタンクが増え続けています。安倍晋三首相は、福島第一原発からの放射能汚染は「完全にコントロールできている」と言い、また政府は居住制限区域の部分的解除を宣言して、放射能の被害をことさら低く宣伝していますが、現地で見ると、被害の深刻さはほとんど軽減されていません。

居住制限区域では、未だに多くの住民が故郷に戻れず、家族が離れ離れの生活を余儀なくされ、家庭や地域社会の崩壊も深刻です。また放射能汚染による健康被害に怯える人々にも、安心させる手立てが何もないというのが現実であるばかりか、将来的な健康被害を恐れる被災者にとって最も知りたいことが、きちんと公表されていないことで、住民はますます不安に陥っているとされています。また、被災地では地域社会の中で、教会の中で、教会付属の幼稚園の中で、家族の中で、放射線被害を話題にすることによって、不信と分裂、崩壊をもたらしている事例もたくさんあります。

2012年5月の定期総会で、日本聖公会は「原発のない世界を求めて～原子力発電に対する日本聖公会の立場」という声明を採択しました。この声明は海外でも大きな反響を呼び起こしました。地球環境の保護保全は気候温暖化に対する全世界的な課題として十数年前から各地の管区・教会で取り組まれています。しかし、「原発反対」を明確に打ち出したのは、あまり前例のないことであったと思います。

この声明では、今回の福島第一原発の事故は、周辺地域のみならず広範囲にわたって放射性物質を飛散させ、人々の命を脅かすとともに、原子力発電そのものが危険極まりないものであるという事実を私たちに突き付けたことを述べてい

ます。そして、この声明の中で、これまでの私たちの原発に対する意識の低さ、無理解、誤解に対する深い反省も述べられています。原発の事故が起こるまで、「原子力の平和利用」の名のもと、私たちは「安全神話」を信じて、原発が生み出すエネルギーを享受してきました。多くの方々が震災以前から原発の持つ問題性を訴えてきたにもかかわらず、私たちの多くはそれに聴こうとしてこなかったことを私たちは先ず反省しなくてはなりません。

いったん事故になると制御することができない原発。しかし、問題はそれだけではありません。原発のエネルギーを生み出すもととなるウランの採掘は、世界の各地で、劣悪な労働環境下で行なわれている実態があります。貧しく弱い立場の人々が、危険を知らされずに働かされている実態があり、また、ウランを精錬してイロウケーキと呼ばれる原発稼働に必要な物資を造る際にも、被爆の危険性は大きいと言われ、それを知らされずに働かされている労働者も多くいます。さらに、精製された核燃料を運ぶ際にも被爆の危険は伴います。そして、原発で使用された核燃料は、捨てる場所がないのです。「トイレ

なきマンション」と言われるゆえんです。日本各地の原発で出された大量の使用済み核燃料の最終処分地として、北海道の原野のようなところの地中深くが考えられていますが、被爆の危険性が何万年と続くこれらのものを過疎化で貧しい地方に押し付けるという考え方も受け入れられるものではありません。

2012年5月の「原発のない世界を求めて」声明は、原発が「神によって造られたいのちを脅かし、神によって創造された自然を破壊し、神によって与えられた平和な暮らしを奪う」ものであると断言しています。そして、それに立ち向かう私たちに対して、「利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換すること」を訴え、原発で苦しみや困難を抱える人々との連帯を呼びかけています。

日本聖公会は、世界の聖公会に向けて、今回の「原発のない世界をもとめる国際協議会」を呼びかけています。原発の事故を体験した日本聖公会であり、また神のお創りになったいのちと自然の大切さを守りたいという信仰ゆえに、この協議会を開催する責任が私たちにはあると信じます。

---

## ACC (聖公会中央協議会) 17からの報告

沖縄教区 主教 ダビデ 上原榮正

4月28日から5月5日まで、香港のゴールドコーストホテルに於いて、ACC17が開かれました。日本からは、ACCメンバーとして私、今回から女性枠として吉谷かおる姉(北海道教区)、通訳として管区渉外主事のポール・トルハースト司祭が参加しました。

ACCとは、聖公会中央協議会のことです。聖公会は世界165カ国にあり、約40管区、2000言語の教会からなります。文化も歴史も言葉も習慣も違いますので、世界聖公会は、教会の一致のために、1888年に決議されたランベス4綱領と呼ば

れる聖公会綱憲を遵奉することで、互いに聖公会の一員であることを認めてきました。



その聖公会綱憲を守り、聖公会の教会共同体一致のために、4つの会議が開かれています。1、全世界の主教が10年に1度イギリスに集まり開かれるランベス会議、2、カンタベリー大主教を議長とする首座主教会議、3、カンタベリー大主教（個人ではなく、聖公会の一致のシンボルとしての機関としてのカンタベリー大主教）、4、ACC（Anglican Consultative Council=日本では全聖公会中央協議会という）です。特に、近年ACCが大切に思われるようになったのは、ACCだけが主教中心の会議ではなく、聖職、信徒も加わっての教会全体を代表する会議だと考えられているからです。

ACCは1968年のランベス会議で決議され、約3年に1度開催され、今年で17回目となります。ACCの現会長は、香港聖公会のパウロ・クオン首座主教です。今ACCは、1名の増加があり、各管区2、3名がメンバーとなり、カトリック、ルーテル教会など他教派の方やACCスタッフなど入れて、140名の会議となりました。



カンタベリー大主教と日本からの参加者

今回のACC17は、8日間の日程で行なわれました。ACCの会議の特徴は、参加者は1グループ10名ほどに分けられ、朝の聖書の学びから各セッションでの議題についても、グループ単位で話し合いがなされたことです。朝から晩まで同じテーブルで、同じメンバーで話し合うのですから、お互いの立場や国や教会の状況についても時間の経過と共に理解が深まるようになっていきます。そのことが、会議の行方をより良い方向へと導いていると思います。

1日の会議の流れは、次のようでした。朝食後、8時・朝の礼拝、8時30分・聖書の学び、9時15分から休憩を挟んで12時15分までに2つのセッションを行ないます。12時15分から聖餐式で、1時15分から昼食、2時15分から午後5時30分までに休憩を挟んで2つのセッションを行ないました。その後は5時30分・夕の礼拝、7時・夕食、スタッフ会議、10時・コンプリンを持って、1日を終わるといふ、かなりハードなスケジュールでした。

わたしは、今回のACCでは聖書の学びがとても気に入りました。聖書の学びは、フランシス修道会の5人のメンバーが指導をして、ルカ福音書24章のエマオへの途上の物語を毎日数節単位で分かち合いました。最初にテゼの短い聖歌を歌い、聖書の数節を読んだ後に、少しの時間黙想をして、グループ内で感じたことを分かち合います。また、その後、修道士会の作った短いメモを読んで黙想をし、感じたことを話し合い、隣の人のために祈るというものでした。誰かが教えるのではなく、短い聖歌を歌い、黙想し、感じたことを分かち合うというとてもシンプルな聖書の学びでした。でも、毎日短い時間のたった数節の学びですが、黙想を繰り返しながら、参加者の霊性は深められて行くのを感じました。これは、各教会でも、すぐに取り入れることが出来ると思いました。

今回とくにACCで大きく取り上げられたことは、①御国が来ますように運動、②女性とユースの会議への参加率のアップや不平等の是正、③セーフ・チャーチ（日本ではハラスメント防止）、④宣教の5指標を教会で実践する弟子訓練、⑤地球温暖化などの環境問題、⑥各地・各国の正義と平和の問題、⑦言語の違う世界に住む教会のコミュニケーション問題、⑧少数民族の問題、⑨同性愛者について、⑩ACC分担金の増額、⑪来年のランベス会議のこと、などでした。これらの内容については、インターネットでACCホームページから見る事が出来ます。関心のあ

る方は、是非にご覧くださいとしたいと思います。



グループでの教会訪問

最後に、今回のACC17には、ナイジェリア、ウガンダ、ルワンダが参加しませんでした。原因は、同性愛者と教会の関わり方です。ACC17でも、そのことに1番長い時間が費やされました。同性愛者への理解と取り扱いが、米国や西洋諸国とアジア、アフリカ諸国の教会では全く違うということです。殊に、イスラム教徒の多い国では、その事実を認めることすら出来ないのが現実です。それを認めれば、教会の信徒が危険になると述べていました。また、同性愛者への偏見や差別は、人権にかかわることだから認めるべきだというのが、米国や西洋諸国の立場でした。そのような問題に、聖公会はどう向き合い、関われば良いのか、信仰と共同体の一致のためにどうすれば良いのか、岐路に立っています。

来年、ランベス会議が開かれますが、この問題がまた大きな事として取りあげられることと、思っています。どうぞ、皆さま全聖公会の一致のために祈りください。



## 沖 縄 週 間

2019年6月23日(日)～29日(土)

沖縄週間は日本聖公会の全教区・教会が沖縄の現実に思いを寄せ、主の平和を求めて祈ることを目的とするものです。



ぬら たから  
命どう宝  
～神の愛に生きる～

「空の鳥をよく見なさい。」  
マタイ6:26

沖縄週間/沖縄の旅は6月21日(金)～24日(月)に行われます

主催：日本聖公会沖縄教区・日本聖公会正義と平和委員会

## 世界総主事会議に参加して

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

総主事会議の始まる前の5月3日～6日に香港で行なわれたACC-17(第17回全聖公会中央協議会)にゲスト参加をさせていただき、いくつかの決議の議論を傍聴することができました。また、中国式の雰囲気のある香港聖馬利亞(マリア)教会での主日礼拝や、香港の聖ヨハネ大聖堂で行われた閉会礼拝は素晴らしい体験でした。

続く5月6～9日には、ACCと同じ会場の香港ゴールドコーストホテルで、第9回世界総主事会議が行なわれ、39番目の管区のスーダン聖公会



会議風景

と40番目のチリ聖公会から参加がありました。

ACO(全聖公会中央協議会事務所)のジョサイア総主事からは、首座主教とともに各教区とのコミュニケーションをより豊かにし、宣教・伝道のよきリーダーとなること。そのためには各管区事務所総主事たち自身が、イエスの弟子としての自覚をもち、仕える者であることが大切だと語られました。

世界の管区事務所総主事会議は、3~4年に一度、有志の集まりとして開催されてきましたが、ACCと時を同じくして開催されたのは今回が初めてでした。一人でも多くの人を教会に招き、イエスの弟子となるためのプログラム(ディサイプルシップ)のことや、誰もが安心して安全な教会となること(今回のACCによって採択されたセーフ・チャーチ・ガイドライン)や、アングリカン・アライアンス(緊急災害支援や開発支援)の地域毎のネットワーキング等についてACOの各担当者からの紹介がありました。

特に各管区がセーフ・チャーチであることを宣言することの大切さや地域毎の協力体制の大切さを強く感じました。ことに、オーストラリアを除く東アジアの管区(韓国、フィリピン、香港、マレーシア、ミャンマー、日本)の総主事は、CCEA(アジア聖公会協議会)の繋がりをより深化させるべく年に一度は集まることを約束し、さっそく来年3月初めに東京での集まりを企画しようとしています。

初日の自己紹介を兼ねた各管区からの報告は、一管区3分ずつという限られた時間でしたが、それぞれの管区が抱える課題や多様なあり方を共有することができました。セクシュアリティや虐待を含むハラスメントの課題や信徒・聖職の減少と宣教体制の強化は、多くの

管区・教区が抱えている大きな課題でした。ボランティアな総主事がいたり、何か国にもわたる地域で奮闘している総主事がいたり、管区のあらゆる施設や収益事業のマネジメントの責任を負っている総主事がいたり、アングリカン・コミュニオンの広さと豊かさを実感しました。

6人ほどのテーブル・ディスカッションでは、それぞれのエキュメニカルな繋がり方や「宣教・伝道・教会の成長」についてのアイデアの交換など、長いようであつという間の4日間でしたが、できればACCの最初から参加して、他の様々な委員会の報告や他の大切な決議の過程を聞き、アングリカン・コミュニオン全体の雰囲気を理解しておくことができればとも思いました。今回の経験から今後はACCの開催に併せて世界総主事会議を行なうことになりそうです。2022年は西アフリカで、2025年にはアイルランドでACCが開催される予定です。

今回のACC-17及び世界総主事会議を招致してサポートしてくださった、ピーター・クーン香港聖公会総主事とACOを含むスタッフの皆さま、ACCの最初から総主事会議の最後まで約2週間にわたって通訳の労を担ってくださった管区事務所渉外主事のポール・トルハースト司祭のお働きに感謝いたします。



世界総主事会議集合写真

## 特集・神学校から

### 「安息日を心に留め、これを聖別せよ。」 <創世記20:8>

〔サバティカルとしての神学院での学び〕

聖公会神学院 校長 司祭 パウロ 佐々木道人

毎日、聖書を読んでも、正直腑に落ちないところがある。「腑に落ちる」とはどういうことかと自問してみると、それは極めて身体的な言葉であるのに気づく。頭で言葉を理解して納得するのとは少々違い、「言葉に、腑＝内臓がアーメンと言う」状態なのか。

最近、神学院での働きを計画する過程で、聖書の言葉と出会い直すことがあった。

昔、神学院の入学試験で、「旧約のモーセの十戒を書け」というのがあり、どう頭をひねっても正解を書けなかったことを記憶している。そしてその十戒の中でも未だに難しいと思う言葉が「安息日」に関する箇所だ。ユダヤ人はこの不思議な戒めを長く守ってきたことを知っている。「神が創造の仕事を休んだから、人もそれにならって休め」とは、いかにも分かるようで分からぬ未消化な思いが続いてきた。その謎の戒めに少し風穴が開いたのが以下の話である。

ちなみに安息日はサバトと言う。その派生語が今回のキーワード「サバティカル」なのだ。

今年度聖公会神学院が計画し実現のため作業しているのは「信徒奉仕職養成1年コース」である。この制度を来年度から運用するため、今年度後半には具体的な内容を公表し、募集できたらと願っている。

昨年の『管区事務所だより』に「継続教育」・「研究休暇」コース制度の紹介をしたが、それは現役教役者の「研究休暇・サバティカル」を支援するため設置されたもので、2019年度は1名の教役者がこの制度によって、1年間神学院に滞在することになり喜んでいる。

サバティカルとは元来聖書の「安息日サバト」からきているが、それは「神の眼差しの下で、人間

の時間を洗い直し再出発する休暇」の意味があるだろう。つまりそれまでの日常から距離をとり、自らの生活を振り返り、同時にこれからの人生の使命を黙想し直す貴重な時間と言えよう。

このような大切な時間を現役教役者のために設定したのだが、視野を広げれば、教会の現場で長年にわたり教会を支え守って来た「信徒のサバティカル」があってもよいと思いつき、今回「信徒奉仕職養成1年コース」の検討を始めている。このコースでは神学院の基礎的な学び、旧約・新約聖書、教会史、等々を「信徒のサバティカル・1年コースの制度」を利用して学んでいただき、さらに教会のために働いていただけたらと期待している。

特に中高年で人生の折り返しの地点に差し掛かった方々がこの「1年コース」をきっかけに、自らの信仰、教会観への思いを刷新し、力を得てくださればと思っている。

以上のように「サバティカルとしての学び」ということを考える時、従来の神学生達も最近では学校を出てすぐの者は少なく、むしろ社会生活をへて、改めて人生を考え直し教会の奉仕職を志す者が大勢を占めてきているのに気づく。つまり神学校というところが、世の働きから一旦離れ、人生を考え直す「サバティカルの機関」と、とらえてもよいのだろう。

これまで考え来て、改めて十戒の安息日の原文に戻ってみると次のような神の戒めである。

「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。」以上は「神が休息したのだからその創造物である人間もその稼業を離

れて安息をしる」という命令である。この命令には以下の言葉が続く。「あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。」ここで言及されている「男女の奴隷、家畜、寄留の民」は、まさに新約のイエス・キリストが心砕いて愛した存在ではないか。

神の命令には愛の意図が込められていたのだ。

十戒と響き合うイエスの言葉を引用する。

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」<マタイ25:40>

ここでは、石ころや雑草のように踏みつけられても黙しているしかない者への慈しみが示されている。これは個人のみならず共同体全体への命令なのだ。そして冒頭の神の命令は「お前が神の命令に従い休めば、小さくされている者を救うことになる」と読めないだろうか。

以上、神学院の状況から聖書を読み返すと、サバティカルとは、これまで一生懸命働いてきた人が、安息することで、結果的に、イエスが愛した小さな人々の休息と救いを創り出すことにつながるのだというのだろう。

「安息日を心に留め、これを聖別せよ」という厳しい神の命令が、改めて現代人を支配し奴隷にしている「人間の時間」を「神の眼差しの下で洗い直せ」という福音として聞こえて来る。それは「お前の時間を、他者のために使え」ということなのかもしれない。奴隷の叫びを聞かれる出エジプトの神の「安息日を守れ」という命令がようやく、腑に落ちて来た思いがする。

「自分のサバティカルは世の仲間のため」という新鮮な思いで、「信徒奉仕職養成1年コース」の企画に、今後は是非関心を持っていただければと願っている。

## 特集・神学校から

### 「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」

～“関係を変えて下さる神”と今年度の神学館

ウイリアムス神学館 館長 司祭 ヨハネ 黒田 裕

#### 入学礼拝の説教から

去る4月3日(水)、2019年度の入学礼拝が行なわれ1名の入学者が与えられた。昨年度は新入生がなかったため2年ぶりの入学礼拝ということになる。私が館長に着任して初めての入学礼拝でもあり喜びもひとしおであった。だから、というわけでもないのだが、入学礼拝の説教にふれながら今年度の神学館についてお伝えすることをおゆるしいだきたい。なお本稿では、史学上「ウイリアムズ」とすべき同師父の名を、私たちが普段親しんでいる「ウイリアムス」という呼称で表記する。

さて、3月の後半のこと。高校を卒業したばか

りの娘に勧められて映画「ラ・ラ・ランド」をビデオで観た。一年ほど前に評判になっていたのは知っていたが、観ることなく終わっていたし、今回もさほど期待してはいなかった。ところが、である。大変感動的で素晴らしい作品だった。物語は、女優を夢見てバイト生活を送るミアと、腕はいいのだけれどオーソドックスなジャズへのこだわりが強すぎてなかなか売れないジャズピアニスト、セブとの出会いとその関係を軸に進む。残念ながら結果的にふたりは結ばれない。だが、最終的にふたりの関係は、添い遂げることはできないという意味ではとても辛く悲しいのだが、何かそれを越えた関係へと変化するのである。

関係の変化—このことから私は2月に行なわれた本館のアメリカ研修で聴いた話を思い出した。R・W・プリチャード教授による特別講義で聴いた話である。19世紀の半ば、青年ウイリアムスたちバージニア神学校の学生たちは、第二次大覚醒運動という大きなうねりのなかにあった。その頃、今でいうローチャーチとハイチャーチとが次のような教えを共有していたという。クリスチャンの生活には2つの段階がある。「状態の変化」(change of state) と「心の変化」(change of heart) である。前者は、例えば洗礼によって入信し教会へと入会することを指す。一方、後者は、前者を経たひとが、さらに深化し刷新されることを意味する。具体的には、信徒となったひとが、そこからさらに按手を受け聖職として献身する、といったことを指す。青年ウイリアムスたちは、ことに後者「心の変化」にあたる、按手を受け聖職となるという召命のうちに自分たちの歩むべき道を見出した。彼らはアジア宣教という行動の中に、神との新しい関係や世界の回心という神の計画への参与のしるしを見たのだった。私はことに前者の「状態の変化」が心に留まらなかった。いまひとつ意味が判然としなかったからである。そこでプリチャード教授に訊くと、師は「状態の変化」とは、つまるところ「神との関係が変わること」と教えてくださった。

神との関係が変わる—。考えてみれば旧約から新約へという展開は神と人間との大きな関係の変化といえる。イエスが「あなたがたを友と呼ぶ」(ヨハ15:15)と宣言する時、そこには僕(しもべ)から友へという大きな関係の変化がある。しかもそれは、「友のために自分の命を捨てること」(15:12)をご自身が私たちに先立ってなされることによって成った。こんな筆舌に尽くしがたい驚くべき仕方でイエスはわたしたちの友とられた。こうしてキリストは、神と私たちとの関係を劇的に変えてくださった。そうした神との刷新された関係を持つ人びとが弟子集団なのではないか。そのような弟子になるよう私たちは呼び出され、友となるということに特徴づけられる弟子集

団を共同体として形成するよう、私たちは召されているのではないか。なお先述のミアとセブのふたりも、それまでの関係から、非常に深い意味で友となろうとし、またそうなっていったのだと思われる。

そして、なによりも、ウイリアムス主教ご自身、生涯を賭して日本にある人びとと友になろうとした、といっても過言ではなからう。一例を挙げれば、雄弁でも美しい修辞があったわけでもないが、日本に福音を伝えるために遣わされたのだからその説教は日本語でなければならない、というのがウイリアムス主教の持論だったと聞いている。

私たちが主から委託されている弟子集団形成への参与とは、こうして、キリストが私たちの友となってくださったことを基礎として、私たちが誰かの友となっていくことのうちにある。今年度の神学館は、本科の充実は勿論のこと、試験的な取り組みも含め、聖職への召命だけではない、多様な召命を持つ人びとの「友となる」ような、換言すれば外への広がりを持つような取り組みをはじめた、ということに特色があるといえるであろう。

#### 今年度の新たな動き

上述したアメリカ研修旅行の報告と神学的省察は今年度の重要な活動のひとつである。研修のあらまは、『神学館ニュース』最新号(第103号)や先月の京都教区報『つ乃ぶえ』(第721号)をご覧いただきたい。今回の旅の目的はウイリアムス主教の生涯とその神学の足跡をたどるというものだった。特筆すべきは先述のプリチャード教授と本館の岩城聰教授とのいわば交換講義で、いずれもテーマは日本聖公会の形成と同師父の歩みをめぐる歴史的・神学的分析だった。また京都にはウイリアムス主教記念碑のレプリカがあるが、今回リッチモンドの墓所にある原碑を訪ねることができた。この碑の前でバージニア教区・スーザン・ゴフ主教とともに記念礼拝を捧げることができたのは感動的であった。ニュー

ヨーク教区のいくつかの教会のミッションにも大いに刺激を受けた。この旅ではバージニア神学校教授のジョン・イエー先生ご夫妻をはじめとする先生方、スタッフ、またニューヨークのMJM（メトロポリタン・ジャパニーズ・ミニストリー）の遠山京子さん、景山恭子さん、さらに聖三一教会のラプファー・公子さんをはじめ聖職、スタッフのみなさんに大変お世話になった。もとより東京諸聖徒教会からの尊いご献金により経費のほとんどを賄うことができた。こうして多くの方々の祈りとご支援によってこの研修旅行を行なうことができた。この場を借りて心から御礼と感謝を申し上げたい。その他詳しくは夏ごろ発行予定の紀要『ヴィア・メディア』第14号に掲載する予定である。

今年度はまた、鈴木恵一主事が教区人事のため退任され、後任に麓敦子主事が着任、現場スタッフとしては館長と主事の二人体制となった。このことは少々寂しいことではあったが、私たちの教授陣に関西学院大学等で教えておられる濱崎雅孝先生（教理学Ⅱ）を新たにお迎えできたことは大きな喜びである。

さらに、昨年度の本紙同月号でもふれた通り信徒の奉仕職養成をみすえた「おためし企画『勧話をつくらう』（5月～6月開講）、また「英国、聖公会の新約学にふれよう!『N. T. ライト読書

会』というふたつの無料講座も開講した。なお2014年からスタートした「今さら聞けない!? キリスト教講座」は6年目を迎え、今年度は本館教授・前川裕先生を講師に新約編を開講している。ネット受講は随時受け付けており過去の講座の動画視聴も可能である。公式サイト（[bp-williams-seminary.org/chair/](http://bp-williams-seminary.org/chair/)）からお申し込みいただける。この項の最後に、見かけ上はささやかな取り組みだが、昨年度の2学期からは聖餐式を除く、聖務での日課朗読に聖書協会共同訳を用いていることを取り上げたい。翻訳の違いもまた、神と私たちとの関係の変化を新鮮さと共にもたらすことへとつながるであろう。

#### 神学館の課題

紙幅の関係でここでは一点だけ申し上げたい。すでに経常化して久しいのだが、低金利時代が続く基金が果実をほとんど生まなくなっていることから、依然として財政難の状態は変わっていない。後援会への入会の呼びかけと神学館の教育内容のアピールのため5月からは大阪教区の諸教会を月2回ほどのペースで回らせていただいている。今後とも神さまのみ旨にかなう神学教育のため皆様のご加禱、ご支援をよろしくお願いいたします。

---

## カルトの被害に遭ったらどうすればいいのか

### ある日突然に

「高校まで真面目に教会に通っていた息子が教会に来なくなり違う教会に一所懸命通っています。」「友達から宗教団体への勧誘を受けているのですが、どうすればいいのでしょうか。」「大学に進学してから一人暮らしをしている娘がいきなり結婚をしようと韓国にいきました。」「うち

### 管区宣教主査 司祭 ステパノ 卓 志雄

の子が変な宗教団体に通い始め、聖公会の教会をサタンの集団だと言っています。」このようなご相談が数多く寄せられている。このような相談の中には信仰を変えただけではなく、経済的に被害を受けている方もいる。労働力を搾取されている方もいる。神に象って創られた貴い命が危うい状態に陥っている場合もある。そして反社会

的な団体に属し犯罪に加担して共犯者となる場合もある。

カルト問題は異端と正統という信仰的な問題だけではない。過度な献金による経済的な損失、家出や離婚、家族関係破壊などの家庭問題、暴力行使や詐欺などの犯罪、そして神によって創られた貴い人間の全てが破壊される問題が起きている。自分とは全く関係のなかったカルト問題がある日突然、あつてはならない自分の出来事として起きた場合どうすればいいのか。本稿ではカルトの被害に遭った時、相談とケア等ができる機関を紹介してカルト問題に対する理解を深めていただきたい。

### キリスト教：カルト問題キリスト教連絡会

<http://controversialgroupscommittee.info/wordpress/>

日本では統一協会、オウム真理教など問題のある宗教団体によって起こる社会問題に対処するために様々な活動が繰り返されている。キリスト教界では「統一協会問題キリスト教連絡会」が2004年10月に組織され、積極的な活動をしている。「統一協会問題キリスト教連絡会」は、日本基督教団、カトリック中央協議会、日本聖公会、日本福音ルーテル教会、日本バプテスト連盟、在日大韓基督教会など超教派で構成されている。

最近では、統一協会だけでなく、様々な団体による被害が増えている現実を勘案し、2015年末名称を「カルト問題キリスト教連絡会」に変えて、その活動の幅を広げている。定期的な会合を通して各教派の相談状況、活動状況、情報を共有しており、それぞれの教派だけで解決できない問題については、エキュメニカルレベルで力を合わせて対処している。クリスチャン人口が人口の1%しかない日本のキリスト教の現実を考えれば、相応の活動である。世界的にはドイツ、フランス、韓国、パチカンなどのキリスト教関係者に対して日本におけるカルト団体による被害を訴えてきた。そして連合活動の一環として、『こ

れが素顔!』という冊子を発行して、日本全国の中高生、大学生をはじめとする青年たちが属している学校、教会に配布して、問題の団体に対して警戒心を喚起している。日本聖公会では毎年管区事務所から全国の教会・礼拝堂に配布している。この冊子は、本来、統一協会関連を中心に編集されたが、宗教による問題が複数の団体によって起こっている状況の中で、冊子の付録として「各教派の相談会で最近増えつつある統一協会以外のキリスト教系団体」というページを追加した。もしカルトによる信仰的な被害を受けている場合は「カルト問題キリスト教連絡会」に連絡していただきたい。「カルト問題キリスト教連絡会」は、相談者の相談内容、お住まい、状況などを考慮して相応しい教派の専門家との窓口の役割を担っている。



### 専門的予防と啓発：日本脱カルト協会

<http://www.jsopr.org/>

問題のある宗教団体に関する各種分野の専門家が集まって研究、相談をする組織として「日本脱カルト協会(JSCPR:The Japan Society for Cult Prevention and Recovery)」を第一に紹介する。「日本脱カルト協会」は1995年11月に設立されたネットワークである。

日本脱カルト協会」の目的は、破壊的なカルトの問題、カルトに関連する個人や家族の相談の経験共有およびカルト予防や社会復帰の過程などの研究を行い、その成果を発表するものである。



オウム真理教を始めとするカルト団体に自分の子供達が入信して教団活動をしていることに悩んだ親たちが以前から「親の会」を組織し、何人かの専門家がそのアドバイザーとなっていたが、1995年6月、オウムの事件を契機に、カウンセラー達が独自に集い、情報交換をすることから始め、同年11月に本会は設立された。

問題のある団体に対する予防と啓発のために組織された「日本脱カルト協会」のメンバー構成は、「心理学者」、「社会学者」、「キリスト教学者」、「仏教学者」、「宗教学者」、「弁護士」、「科学者」、「哲学者」、「大学関係者」、「ジャーナリスト」「カルト団体の元信者」など、幅広い専門知識や経験を持つメンバーである。彼らは日本各所の学校、会社、官公庁、地域の集まりで講師として講演を行なっている。

様々な分野で活動している専門家のメンバーが絶え間なく研究を行ない、その成果を出版している。また、「日本脱カルト協会」が直接編集した「カルトからの脱会と回復のための手引き 一家族なので、あきらめない 一大切な人を守りたい」という本も出版した。

**教育: カルト対策学校ネットワーク**

[http://www.jscpr.org/school\\_network](http://www.jscpr.org/school_network)

キャンパスの大学生は、カルトにとって良い餌である。例えば、「CARP (Collegiate Association for the Research of Principles)」と呼ばれる「原理研究会」がある。「統一原理」を研究する統一協会の学生組織として「世界大学原理研究会」(W-CARP/ World CARP/ World

Collegiate Association for the Research of Principles) が世界 80 余国で活動しており、日本では「全国大学連合原理研究会」(Japan Carp、略称・J-CARP) という名前前で、70 以上の大学で活動している。また 2006 年マスコミでも大きく取り上げられたカルト宗教「摂理」は、再び大学キャンパスがカルト問題の現場になっていることを明らかにし、こうした問題に対する対策は大学の社会的責任であるとの認識が広まりつつある。既に多くの大学で具体的な対策が講じられているが、このような状況において全国的な大学のネットワークの必要を痛切に感じたカルト対策の関係者は、インターネットのメーリングリスト機能を用いて、大学の学生部や健康管理センター、宗教系の大学であれば宗教センターなど、カルト問題に直接対処する部署に所属する教職員が、必要に応じて情報交換できる組織を作ることになった。

「大学ネットワーク」の参加大学は、最初に 40 校であったが、2015 年 2 月 2 日現在、175 校に増え、参加大学について相談や、情報提供などの活動をしている。ただ、カルト問題の現場になっているのは大学キャンパスに限らないことに鑑み、このたび高校や専門学校、高等専門学校等を含める形で、「カルト対策学校ネットワーク」と名称を改め、日本脱カルト協会がその正規事業として引き継ぐことになった。もし学校に通っているわたしたちの子どもがカルト被害を訴えている場合、このネットワークは非常に有効である。



### 被害者家族：全国統一協会被害者家族の会

<http://e-kazoku.sakura.ne.jp/index.shtml>

日本において、大切な家族をカルト、ことに統一協会に奪われてしまった統一協会信者の家族の集まりである「全国統一協会被害者家族の会」は、2003年11月に設立された。現在のこの会の活動メンバーは、統一協会をはじめとするカルト団体から家族を救った者が多い。大切な家族が悪名高いカルト団体に関わってしまった際どのように対応すればいいのか右往左往しありとあらゆる手段を使って家族を救いたいともがき苦しんだ経験を生かして、被害者のケアに尽力している。

### 法曹界：全国霊感商法対策弁護士連絡会

<http://www.stopreikan.com/aboutus.htm>

日本では、統一協会の正体を隠した伝道やマインド・コントロール、霊感商法による金銭被害、合同結婚の強制によって婚姻の自由が侵害されるなどの被害が絶えない。統一協会によって行われている活動の違法性と反社会性を社会に訴えて、そのような問題に組織的に対処するために全国霊感商法対策弁護士連絡会（略称「全国弁連」）は1987年5月に、全国の約300名の弁護士が賛同して結成された。これに先立って、同年2月に東京の弁護士で「霊感商法被害救済担当弁護士連絡会」を結成し、通称を「被害弁連」とした。被害弁連は、全国弁連傘下の、東京の弁護士の連絡会である。

全国弁連（その主力は東京の被害弁連）は、常設の事務所を持ち、そこで情報を収集し、メンバーに発信をし、相談電話に応じている。統一協会の信者やその家族の相談の外、統一協会以外の相談も多い。企業や官公庁、公的団体等からの統一協会等にかかわる問い合わせもある。設立以来、年間平均して1000件程度の問い合わせがある。また、メールアドレスにも喫緊の相談が連日寄せられている。1987年から2015年までの相談件数は33,789件、被害金額は1,177億円である。「被害弁連」は経済的被害に対処する



ことによって被害者が立ち上がっていくことを願っている。

### 終わりに

教会が世の塩と光の役割を担うためには、神から与えられた正義と平和を破壊する異端的キリスト教系団体の問題について積極的に取り組む姿勢が必要であろう。またその際には、彼らとの物理的対決や対立よりは彼らの変化を求めて真摯に祈り、持続的研究、予防、啓蒙活動および対話を続けることが大切である。しかしこれらの団体の横暴により神にかたどって創られた人間の尊厳 (Imago Dei) が抑圧される時には、果敢に預言者的立場から神の正義を宣言し行動していくことを躊躇してはならない。また教会は祈りに伴う行動に基づいたエキュメニカルな連帯を通して、異端的キリスト教系団体による問題の解決のため共に取り組んでいくことが大切である。殊に今も苦しみ嘆いている被害者の涙を拭い取ることがわたしたちの使命であることを忘れてはならない。



## 世界の聖公会の動向

- ・カリブ海沿岸で災害への備えと回復力養成のための訓練を実施
- ・2020年首座主教会議を開催予定

管区渉外主事

司祭 ポール・トルハースト

### ○カリブ海沿岸で災害への備えと回復力養成のための訓練を実施

カリブ海沿岸の聖公会関係者は、カリブ海の島国であるグレナダで開催された「牧師と災害」と題するワークショップに参加した。これは近年島国を襲った多くの自然災害がきっかけとなって開催されたものである。

アングリカン・アライアンスの広報担当者は、次の通り述べた。「アングリカン・コミュニオン教会や地域社会は、より一層危険性を増す気候変動に直面しています。特に吹きさらし状態となる島のコミュニティは被害を受けやすく、ハリケーン、サイクロン、高波、洪水などの甚大な被害をもたらす気象活動、また海面上昇がすでに『新たな常識』になりつつあります。教会はしばしば災害対応の最前線におかれ、被災者の回復力を高める上で重要な役割を果たすことが期待されています。」

参加者は災害への備えと復興に関する自分たちの経験を共有し、『牧師と災害のためのツールキット (Pastors and Disasters Toolkit)』を使用して最良の実践を学んだ。このテキストは、米国聖公会の災害支援組織 (ERD) がベースとなり、教会が効果的な対応をするための実用的なツールを提供している他の聖公会機関と協力し

て作成した、コミュニティのための災害リスクの軽減とマネジメントをまとめたものである。

アングリカン・アライアンスの災害対策・復興担当者、ジャニス・プラウド博士は「アングリカン・アライアンスとパートナーは、あらゆるレベルでの回復力の構築を支援することへ向けて焦点を移しています。このようにして、教会、地域社会、そして個人は、自らの脆弱性を減らし、資産を使って能力を高めることを目指しているのです。」と述べた。

### ○2020年1月に首座主教会議を開催予定

カンタベリー大主教は、2020年1月の首座主教会議へ招待するため、世界聖公会40管区の指導者たちに手紙を送付した。首座主教会議はアングリカン・コミュニオンに4つある「柱 (Instruments of Communion)」の1つであり、前回の会議は2017年10月にカンタベリーで開催された。2020年の会議は1月13日から17日までヨルダンの首都アンマンで開催される予定である。

大主教は手紙の中で、暴力、汚職、貧困、宗教に基づく差別、および気候変動に関連した海面上昇など、世界中でクリスチャンが直面している「長く苦痛に満ちた」困難なリストを挙げたが、「世界を取り巻く現実的問題の渦中において喜びを担うことが私たちの使命です。」と述べた。

大主教は、首座主教たちに対して共に議題を決めることを希望していると書き送った。その中には2020年のランベス会議に関する議論、さらには2016年首座主教会議の後に設立された大主教のタスクグループの課題に関連し、人間関係を回復し、相互の信頼と責任を再構築し、傷ついた遺産を癒し、アングリカン・コミュニオンにおけるより深い人間関係を探求するための方法を探ることが含まれている。

日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.org/province/>

☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメール、また郵便でお寄せください。

## 森紀旦主教著『改訂増補 マラナ・タ』を刊行

京都教区宣教局礼拝部長 司祭 セオドラ 池本 則子

森紀旦主教著『マラナ・タ』が1998年10月に出版されてから20年が経ちました。1990年に祈祷書が改正されたことに伴い、京都教区報「つ乃ぶえ」に連載で森主教様（当時司祭、ウィリアムス神学館館長）が新しい祈祷書について執筆してください、連載が終了した後、「つ乃ぶえ」編集委員会が1冊の本としてまとめ、『マラナ・タ』が出版されました。サブタイトルには、一楽しい『日本聖公会祈祷書』入門—とあり、洗礼・堅信志願者の準備に大いに活用されたことと思います。また、『マラナ・タ』を用いて、各教会で祈祷書の勉強会なども行なわれたのではないのでしょうか。京都教区だけではなく、全教区の方々が読んでくださったと思います。

1990年版祈祷書は文語体から口語体へ変わっただけではなく、時代の変化と共に、礼拝の考え方なども見直されました。『マラナ・タ』では、森主教様ご自身の体験談なども交えながら、新しい祈祷書についてわかりやすく解説してください、私も前赴任教会の婦人会例会で楽しく学ばせていただきました。

そして2017年には『マラナ・タ』の存在を知らない方々も増えてきました。また、『マラナ・タ』の再販を望む声も聞こえてきました。そんな中、京都教区宣教局礼拝部では、洗礼・堅信志願者の準備のために、また『マラナ・タ』の存在を知らない新しい信徒の方々のために、さらには、改めて祈祷書を楽しく学んでいただくために、再度森主教様に執筆をお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。初版をかなり手直しして下さると共に、新しい項目も追加して下さり、かなり豊かになりました。23項目から成る『改訂増補 マラナ・タ』は、祈祷書の中表紙「救主降生1990年」から始まり、「礼拝堂聖別式」で終わります。ほぼ祈祷書を網羅しています。お堅い専門的な解説書とは違い、ご自身の体験談を交

えた内容はおもしろく、身構えなくても気軽に読める本です。求道者に限らず、信徒の方々も、また教役者も共に、それぞれの教会に集う皆さんで読み合う機会を持たれることによって、祈祷書をさらに身近なものとしていただき、豊かな礼拝を献げられることを望みます。ちなみに、京都教区の大和伝道区では、今年の伝道区大斎集会で『改訂増補 マラナ・タ』の中のいくつかの項目を出席者で読み合い、意見交換して楽しく学び合うことができました。それぞれの教会や教区で様々な学びをしていただけることを期待しています。

各教会で、また初版をお持ちでない方も、初版をお持ちの方も、是非改訂増補版をお買い求めいただきたいと思います。

2018年11月に発行しましたが、初版から20周年を迎えた年に発行できたことは、礼拝部にとって大きな喜びでした。そして、何よりも森主教様が一番喜ばれていることと思います。森主教様は最後の校正原稿を送ってくださった2日後に神様のもとに召されました。死の間際まで『改訂増補 マラナ・タ』に情熱を注いでくださった森主教様に感謝すると共に、一人でも多くの方々がこの本をお読みくださり、祈祷書を大切に思ってください、何よりも森主教様の魂の平安につながることはないかと思ひます。

本書のご注文は管区事務所または京都教区教務所まで、お願いいたします。



(B6判、本文152ページ、頒価800円)